



野村 幸正 (のむら ゆきまさ)
 1947年生まれ
 関西学院大学大学院修了 関西大学文学部教授
 認知心理学専攻 文学博士

【著書】

- 『現代基礎心理学 記憶』東京大学出版会 (1982 分担執筆)
 - 『心的活動と記憶』関西大学出版部 (1983)
 - 『漢字情報処理の心理学』教育出版 (1983 海保と共著)
 - 『サバイバル・サイコロジー』福村出版 (1985 井上と共著)
 - 『知の体得』福村出版 (1989)
 - 『関係の認識』ナカニシヤ出版 (1991)
 - 『生きるもの・生きること』福村出版 (1992)
 - 『認知科学ハンドブック』共立出版 (1992 分担執筆)
 - 『かかわりのコスモロジー』関西大学出版部 (1994)
- 他論文多数

個人的知識を超えて
 野村幸正著

関西大学出版部

臨床認知科学

臨床認知科学
 個人的知識を超えて
 野村幸正著

関西大学出版部

ISBN4-87354-273-1 C3011 ¥3100E 定価(本体3,100円+税)

臨床認知科学

— 個人的知識を超えて —

野村幸正著

関西大学出版部

【本書は関西大学研究成果出版補助金規程による刊行】

はじめに

夜もふけ、街ゆく人も随分少なくなったが、カルカッタの街の気温はいつこうに下がらない。最悪の都市と呼ばれるにふさわしい街中を、私は路上生活者を横目に見ながらハウラーステーションに向かって急いだ。インド的時間であろうか、夜行列車は大幅に遅れ、ヴァラナシに到着したのは結局翌日の昼下がりであった。その日は新市街地にある某ホテルに宿泊し、翌早朝、私は悠久のガンガールの流れに我が身を委ねたのである。一九八七年六月九日のことであり、くしくもその日は私が独りで迎えた四〇歳の誕生日でもあった。その頃の私は不惑の歳とは裏腹に不透明な心境であったが、このことは一〇年の歳月を経たいまをもつてもなお否定しえないように思われる。

いまにして思えば、私がインドに旅立った一九八七年は、サッチマン、L. A. が『プランと状況的行為』を出版した年であり、「認知革命第二波」の元年とも呼ばれている。その著書は従来の認知研究を大幅に覆す契機になった一冊であり、そう呼ばれるにふさわしいものである。また、私自身も、微力ながら当時の学問の限界と変化の可能性を肌で感じとっていたのであろう、拙著『知の体得——認知科学への提言』を脱稿し、さらに自らの身体を揺り動かすような「何か」を求めて、二月の雪の降る日にインドに旅立ったのである。諸般の事情で、出版は帰国後となったが、いまだいう状況的認知研究の一端を担うものとして位置づけてよいと自負している。

その後、私はたびたび彼の地に我が身を委ねている。私の身体が捉えるインド世界は未だに混沌としたものであるが、私は混沌のなかにおのずと立ち現れる一つの秩序を直観することがある。それは明示的なものではなく、

むしろ暗黙の、素朴な秩序であり、私を方向づける秘めた力をもっているようである。その力に押し動かされるように、私は訪れるたびに新しいインドを、そしてそれに映し出される新たな自己を感じとってゆく。不思議としか言いようなない体験である。これらの体験は、いまでは私の血となり肉となり、私そのものを形作る重要な部分を占めている。

当時、私がインドに求めたものは情報処理理論の限界を克服すべき「心についての深い思索」であり、その手掛かりであった。インド滞在中、私はプーナ大学で「インド哲学におけるマインドの概念について」というテーマで研究を進めながら、新しい認知研究のあり方を模索していたのである。帰国後もその模索は続き、私は四〇代すべてをそれに費やしたことになる。しかし、未だに確固とした結論を得ているわけではない。私の模索は今後も続くと思われるが、この一〇年という歳月の重みを踏まえて、あえて上梓したのが本書である。

本書の基底には、なによりもまず、筆者の三〇年近くに及ぶ認知研究への思い入れがある。また、僅か一〇年という限られた期間であるにしても、仏像彫刻という場で「彫る」ことを学び、あるいはまたインドという場に身を委ねて、その風土的心性を了解してきた自身の直接体験がある。これらの体験はいまなお続いている。私は体験を通して、時には純粹経験に潜入し、時にはそれを分化している。潜入と分化という絶えまない繰り返しのなかで、「私」が私として立ち現れてきたのである。

本書は、まず、固有の場での個人的体験を取り上げ、その内実を自証し、自らの言葉で記述する。さらに、その記述の核なる部分を、私自身の専門領域である認知心理学、認知科学の最先端の知見を援用しながら論理的に裏づけ、あるいはその普遍化をはかったものである。この場合、固有の場での体験、その内的な過程の自証と記述、さらには専門である最先端の知見のいずれもが私の表出である。私の表出は法則の定立とその適用という形をとるの

ではなく、あくまでも私の「ひと」としての働きとしてある。しかも、その働きは私の身体を通して一つの知の体系を構成する。この知の体系のもとでは、もはや認知研究あるいは臨床研究といった区分は不必要であり、それらはともに「ひと」の働きの所産でしかない。その働きは私の皮膚の限界内に閉じ込められたものではなく、世界とのかかわりの真つ直中にある。この意味で、その働きは「あいだ」としての知を構成する。本書を『臨床認知科学——個人的知識を超えて——』としたのはこのためである。

最後になったが、本書を上梓しうるのは、ひとえに心理学とは無縁とも思われるインドでの在外研究を快諾された関西大学に負うところが大きい。また、帰国後二年間、京都大学教育学部、同大学院で心理療法の一端を学ぶなかで、私は自らのインドでの体験を意味ある経験にまで高められたような気がする。ご指導いただいた諸先生に感謝したい。さらに、私の師である石原岩太郎先生、関西大学大学院の院生諸君、なかでも増田節子さん、森田泰介君には特に貴重な意見をいただいた。あるいはまた、私は仏像彫刻を通して、「わざ」世界の一端を自らの身体で深く感じとっている。矢野公祥仏師のご指導の賜物である。最後に、出版にあたっては関西大学出版部の方々には随分お世話になった。ここに記して感謝の意を表したいと思う。

一九九八年六月九日

一〇年の歳月のはざままで

著者

目次

はじめに

序章 何故に、いま、臨床認知科学か

I 臨床認知科学とは 1

1 近代の知を超えて 1

2 新しい知識観 5

3 臨床認知科学の構築 10

II 本書の構成 14

第I部 臨床認知科学の構築にむけて

第1章 臨床の場に身を委ねて

I 透明な世界の崩壊と構築 20

II インド 24

1 風土的心性の了解 24

2 個人的体験の意味づけ 27

III 仏像を彫る 31

1 彫ること 31

20

1

i

2 全体を捉える 33

第2章 融合理論 39

I 機械論から生氣論へ 39

1 認知研究は機械論を克服したか 39

2 「ある」から「なる」へ 43

II 融合理論にむけて 47

第3章 「ひと」の働きと不二体 52

I 「ひと」の働き 52

1 臨床の知 52

2 純粹経験から暗黙知へ 55

II 不二体 58

1 何故に、いま、不二体か 58

2 生の根源 65

第4章 関係性 70

I 暗黙から明示へ 70

1 重みづけ 70

2 媒体——言語と身体 73

3 不二体を感得する 77

II 自己言及活動 79

1 認識と生命 79

2 いま・ここの拡がり 82

3 空と唯識 86

第II部 状況による支援

第5章 表象主義を超えて

I 表象主義 92

1 情報処理の枠組み 92

2 表象—プラン—行為 95

II かかわり 99

1 アフォーダンス 99

2 かかわりのレベル 103

第6章 状況的認知論

	I	生態学的妥当性	107
	1	かわりあうこと	107
	2	認知と行為	110
	3	共起	112
	II	分散認知	115
	1	脱中心化と関与	115
	2	分散認知系	118
第7章		媒体と透明性	125
	I	不二体を分化する	125
	II	透明性を保証する	130
	1	「わざ」言語	130
	2	エスノメソドロジー	133
第8章		支援と制約	139
	I	生きられる世界	139
	1	風土的心性	139
	2	文化の固有性	143

II 道具 145

1 道具とは何か 145

2 「人+道具」の視点 149

3 道具の知 151

4 社会的相互行為 154

第III部 何を獲得するのか

第9章 心身の統合

I 生ける身体 160

1 いま一つの身体 160

2 開かれた身体 162

II 無の場所 166

1 深化する身体 166

2 行為的直観 170

第10章 知性的技能

I 二元論の克服 174

1 二元論 174

2 知性的技能とは 178

II 知性的技能としての「わざ」 182

1 知性的技能の習得 182

2 何を学ぶのか 185

3 木に埋まっている仁王 189

第11章 記憶としての身体 194

I いま、何故に、想起か 194

1 自己と記憶 194

2 想起としての記憶 197

II いま・ここの働き 202

1 覚えのない記憶 202

2 二つの想起源 205

第12章 場と伝授 209

I 場の構築 209

1 身体と行為的空間 209

2 経験と技能 212

II 伝授 217

1 教えない教育 217

2 正統的周辺参加 221

第IV部 私というもの

第13章 未知の構想

I 創造とは 230

1 即興性 230

2 創造行為 233

3 自己創造 238

II 日常性を突き抜ける 242

第14章 自己知

I 自己とは 248

1 対象化された自己 248

2 動的な自己 252

3 行為の集積としての自己 255

II 自己理論から自己知へ 258

第15章 意識に埋め込まれた身体 264

I 輪廻転生 264

1 魂 264

2 転生 267

3 アートマン 270

4 解脱 273

II いのち 275

終章 さらなる展開にむけて 281

引用・参考文献 290

事項・人名索引 1